

『平家物語』における武士の「情」について

The "Jyo (Nasake)" of Samurai in Heike monogatari

Yu JUN

于 君

一 はじめに

今日広く流布している武士道イメージは、新渡戸稲造をはじめとする明治期武士道論によって形作られたとされる。それはまた、武士の実態を離れ観念化された武士道だとされる^(一)。では、近代に再構成された「武士道」ではなく、武士の本当の姿は何だろうか。筆者はまずこのような問題に関心を抱いている。その中でも、近世期における『葉隠』的武士道と儒教的士道に代表される「武士」^(二)ではなく、それ以前の、発生期の武士の姿について、まず明らかにしたいと考えている。初期の武士を題材とした軍記物語として著名なものは「保元物語」、「平治物語」、「平家物語」である。そして、この三つの中で現在に至るまで最も愛読され読み継がれて来たのは『平家物語』である。武士が発生し、歴史の表舞台に登場した『平家物語』の武士から、後に構成された武士像の原型も探ることが出来る。本稿では、『平家物語』を取り上げ、その中に描き出された初期武士の思想について考えることとする。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり」と『平家物語』の冒頭に書かれているように、特に仏教の無常思想が『平家物語』を貫いていると一般に言われる。その一方で、「君の御ために、奉公の忠をいたさんとすれば、迷慮八万の頂より猶かたき、父の恩忽ちに忘れんとす。痛ましき哉不孝の罪をのがれんと思へば、君の御ために既に不忠の逆臣となりぬべし」(巻第二「烽火之沙汰」)とあるように、忠と孝をはじめとする儒教的な道德概念を表す言葉もまた、同書中に多用されているのも事実である。これは『平家物語』を一読したことのある読者が、容易に気が付く事である。しかし、だからといって、『平家物語』に描かれている武士の気質や思想を、

安易に仏教や儒教思想に還元させて考えることは、『平家物語』の本質を見失ってしまうだろう。

たとえば、『平家物語』の中の道德観念について、かつて津田左右吉は「文学に現はれたる我が国民思想の研究」の中で次のように述べたことがある。

道德的な観念は此の時代の新しい文学たる戦記ものに於いて、一層著しく現はれてゐるのみならず、其の思想にも特色がある。これは其の題材が武士であるのと、其の作者が儒学や仏典の文字上の知識を有つてゐる僧徒であるののためであらう。戦記ものが昔から行はれた漢文と同じやうに、風景を叙しても成語や故事をもとにして強ひて一種の型に嵌め込まうとする癖があることは、前にも述べて置いたが、人事についてもそれと同じく、兎もすれば支那風の忠とか孝とかいふ文字を並べたがるので、従つてさういふ文字の多く現はれる戦記ものは、道德的の調子が高いやうに見えるのである。平家物語(巻二)が清盛を諫める重盛に、君に忠を致さんとすれば父の恩を忘れんとす、不孝の罪を通れんとすれば不忠の逆臣となりぬべしといはせた、名高い話なども其の一例である(…中略…)これも作者が僧侶であるからである。しかし、戦記ものに現はれてゐる道德思想は、さういふ知識から来たものよりも武士の實際生活から養成せられたものに於いて真の精神が見られるので、儒学や仏教の信条はただそれに多少の色彩をつけたに過ぎないのみならず、根柢の精神には寧ろそれと一致してゐない点がある^(三)。

上述の引用で、津田は、「戦記もの」(軍記もの)に儒教や仏教的な道德観念が多

用されたのは、作者が当時の知識人である僧侶であつたからだと説明し、他方、そこに現れる道徳思想は完全に知識から来たものではなく、武士の實際生活によつて養成されたと指摘した。この津田の発言は、『平家物語』の道徳観念を読み解くうえで重要な示唆を与えてくれる。津田は統いて、

武士を支配してゐる道徳思想は、彼等自身の生活から自然に生まれたものであつて、外から与えられたもので無く、さうしてそれが教として若しくは信条として組織だてられず、知識としての理論的基礎をも有つてゐないのみならず、彼等の間の社会的習慣としてもまだ十分に固定するほどになつてゐないから、厳格なる義務として遵奉せられるよりは自然の情誼として實際の行動に現はれるものである。さうして武士の生活そのものが死を期して戦争に従事するのであるから、其の道念、其の特殊の情操も此の間から生まれ、また生死の関頭に立つ場合に於いて最も著しく發揮せられる^四。

とも述べている。「……それが教として若しくは信条として組織だてられず、知識としての理論的基礎をも有つてゐないのみならず、彼等の間の社会的習慣としてまだ十分に固定するほどになつてゐないから、厳格なる義務として遵奉せられるよりは自然の情誼として實際の行動に現れるものである」とする津田の言葉からも、『平家物語』など「戦記もの」に描かれた武士の内には、後世（江戸以降）でいう「武士道」のごとき諸観念が未だないと言える。本稿では、このような、武士の社会的習慣が十分に成り立っていない段階として、『平家物語』の中に描かれた武士を取り上げる。その上で、『平家物語』の武士について、津田の言を参考に、特に「生死の関頭に立つ場合」を取り上げながら、どのような道徳思想が、いかに発生し、行動に表れたのかを考察することとする。

ところで、いうまでもなく『平家物語』は文学作品である。文学作品には、当然誇張と虚構が含まれる。そのため、文学作品に登場する武士が現実の武士の生き方と相違する点もあるだろう。しかしながら同時に、『平家物語』の中に「凡そは此おとど、文章うるはしうして、心に忠を存じ、才芸すぐれて、詞に徳を兼ね給へり」（巻第三「医師問答」というように、理想的な人物像として平重盛像が語り出され

た事実、武士を含め、当時のより広範な民衆において、何が重要視されたかを示すものだろう。つまり『物語』において何が「語られた」かという点から、その時代の思想を読み取ることも可能だろう。津田は、『平家物語』の中の仏教や儒教的な概念を書き手の問題だと指摘する。当時は確かに末法の世にあつた。その退廃的な雰囲気は、滅び行く平家を感傷的に叙述する『平家物語』に色濃く反映している。まさしく中世のあの時期の時代精神をそこから読み取ることができようであろう。さらに、『平家物語』というテキストには、種々の作者が想定されるし、また非常に多くの異本が存している。ゆえに、より広範の人々の思想を包み込んで作られたという点で、他の物語に比べ、より人々の思想が読み取れる面もあると考える。こうした点も意識しながら、武士が『平家物語』というテキストの中でどのように描かれたのかについて考えたい。

二 武士の「情」

上述したような、『平家物語』に描かれた武士の道徳思想を解明する際に一つのヒントを与えてくれるのは、「武士を支配する思想の根本は情である」^五という津田の指摘である。この「情」について、津田は、『平家物語』（巻第十一「嗣信最期」）で自分の身代りになつて死んだ佐藤嗣信の為に、僧を呼んで弔つてやるのは「情ある振舞」と言い、また、女また男の為に出家あるいは入水するのも「情のため」であると評した。このような全く違う人間関係に見られる人の心情的表出をともに「情」と説明した津田の言は、逆に私たちに、『平家物語』における「情」^六とは一体何かについて考えさせる。

本稿ではまず、『平家物語』^七に描かれた具体的な場面、特に津田も指摘した生死の関頭に立つ場面における、武士の言行に現れる自然の情誼としての「情」について考察し、武士の思想を考える。津田は武士の「情」は主従・父子・夫婦・敵という四組の関係に渡つて現れてくると指摘している。次節以降、武士同士の関係である、主従関係、父子関係、敵関係に見られる武士の「情」に着目して考えてみたい。

二一 主従関係における「情」

木曾義仲と今井兼平

『平家物語』の中で、武士の主従関係について特に注目されるのは、木曾義仲と今井兼平のエピソードである。まず、この二人の間に現れる主従関係にどのような特徴があるのかについて考えてみたい。

源頼朝の木曾義仲追討により、義仲が大軍の中に駆け入って討たれそうになった時、義仲は涙を流して、

かかるべしとだに知りたりせば、今井を勢田へはやらざらまし。幼少竹馬の昔より、死なば一所で死なんとこそ契りしに、所々でうたれん事こそかなしけれ。

今井がゆくゑを聞かばや(八)。

と語つたと記される。「幼少竹馬の昔から、死ぬなら同じところで死のうと約束したのに。別々のところで討たれるのは悲しい、今井の行方を聞きたい」と泣く義仲の様子からは、彼の今井を思う気持ちの切実さが伝わる。特に「幼少竹馬、死の約束」などの言葉から、義仲と今井が幼い頃から固い絆で結ばれていたことが分かる。そして、死の間際における義仲の今井に対する感情からは、他の部下には持たない、主従関係を超越しようとするものがうかがえる。次の引用は、この感情を最も明確に表わす部分である。

義仲は七騎になるまで討ち取られ、長坂を通過して丹波路へ向かうと言われた。また竜花越えをして北国へ向かうとも噂された。しかし義仲は、今井の行方を求めて、勢田の方へ逃げ落ちていく。

今井四郎兼平も、八百余騎で勢田をかためたりけるが、わずかに五十騎ばかりにうちなされ、旗をばまかせて、主のおほつかなきに、みやこへとつてかへすほどに、大津の打出の浜にて、木曾殿にゆきあひ奉る。互になか一町ばかりよりそれと見知つて、主従駒をはやめて寄りあうたり。木曾殿、今井が手をとつ

て宣ひけるは、「義仲六条河原でいかにもなるべかりつれども、なんぢがゆくゑの恋しさに、おほくの敵の中をかけわつて、これまではのがれたるなり」。

今井四郎、「御詫まごにかたじけなう候。兼平も勢田で討死仕るべう候ひつれども、御ゆくゑのおほつかなきに、これまで参つて候」とぞ申しける(二〇)。

八百余騎からわずかに五十騎ほどにまで討ち取られた中で、今井兼平もまた、義仲が今井を思う気持ちと同様に、主人の事を心配していた。一町(百九メートル)離れたところからお互いの顔を見知り、急いで相手の前に駆けつけて行った。義仲の「今井がてをとつて」という行為の描写には、単なる主人の侍従に対する気持ちを超えた愛情のごときものが描き出されている。後に続く二人の会話からも分かるように、義仲も今井も、お互いへの心配があつたからこそ、ここまで戦つてきたのである。すなわち、主人が侍従を、侍従が主人を思う強い感情があつたからこそ、討死したはずの二人を、共に死を迎えるまで生きのびさせたのである。

この二人のお互いへの執着は、二人が死ぬ寸前の行動にも見られる。疲れ果てた義仲は同じところで今井と討死したかつたが、今井に自害を勧められた。仕方がなく馬一騎で粟津の松原に入つて自害しようと決めた。しかし、正月なので薄氷は張つていて、松原に深田があるとは知らず、馬を入れたところ、馬の頭が見えなくなり、鞭で打つても馬が動かない。このような危険な時でも、「今井がゆくゑのおほつかなきに、ふりあふぎ給へる内甲を(…中略…)」ついに木曾殿の頸をばとつて「げり」(巻第九「木曾最期」)、すなわち、今井への心配で振り向いた時について討たれたのである。死ぬ寸前までも侍従である今井のことを考えていた義仲の様子が描かれている。他方、主人を庇う為に踏ん張つて戦つてきた今井も主人が討たれたことを知つた後、すべての闘志をなくし、「太刀のさきを口にふくみ、馬よりさなかさまにとび落ち、つらぬかつて」という壮絶な自害(二)を遂げるのである。

上述の場面から、主人である義仲と、侍従である今井兼平の二人の心の結びつきが、我々が思う以上に深いことが見えてくる。なぜ主従関係において、このような同志的紐帯が存しているのか。さらに、別の場面における主従関係の例を参考に考えてみよう。

義経と嗣信

八島の合戦の場面で、平氏は義経軍が少数と見て、反撃に出る。その中で、勇將である能登守教経が源義経を射落とそうと狙っている。源氏の方もこれを心得ていて、一騎当千の武士たちが、義経が射られぬようにと、その正面に立ちふさがっていた。そして、その中の一人、佐藤三郎嗣信が、左手の肩を右手の腕の方へつつと射抜かれて重傷を受けた。その後の義経と嗣信の会話は次のようである。

判官は佐藤三郎兵衛を陣のうしろへかきいれさせ、馬よりおり、手をとらへて、「三郎兵衛、いかがおほゆる」と宣へば、息のしたに申しけるは、「いまはかうと存じ候」。「思ひおく事はなきか」と宣へば、「何事をか思ひおき候べき。君の御世にわたらせ給はんを見参らせで、死に候はん事こそ口惜しう覚え候へ。さ候はでは、弓矢とる者の、かたきの矢にあたつて死なん事、もとより期する処で候なり。就中に、「源平の御合戦に、奥州の佐藤三郎兵衛嗣信といひける者、讃岐国八島のいそにて、主の御命にかはり奉つてうたれにけり」と、末代の物語に申されむ事こそ、弓矢とる身には今生の面目、冥途の思出にて候へ」と申しもあへず、ただよわりによりにければ、判官涙をはらくとながし、「此辺にたつき僧やある」とてたづねいだし、「手負のただいまおちいるに、一日経書いとぶらへ」とて、黒き馬のふとうたくましいに、黄覆輪の鞍おいて、かの僧にたびにけり。判官五位尉になられし時、五位になして大夫黒とよばれし馬なり。一の谷の轡越をもこの馬にてぞおとされたりける。弟の四郎兵衛をはじめとして、これを見る兵者共みな涙をながし、「此君の御ために命をうしなはん事、まったく露塵程も惜しからず」とぞ申しける⁽¹¹⁰⁾。

自分の身代りとなつて重傷を受けた嗣信を見て、義経は義仲と同じように、まず嗣信の「手をとらへて」話を進める。主人に「思ひおく事はなきか」と聞かれた嗣信は、死んでも主人の今後の出世が気にかかること、武士として生まれたからには主人の命の為に討たれるのは自分の名誉であることを述べる。この後、義経が高僧に頼んで佐藤嗣信を弔おうとしたと述べられているのは、嗣信のそれまでの行いは

もちろんのこと、この間際の言葉が侍従としてふさわしいものであると評価されたからであろう。さらに義経は、その僧に、判官が五位尉になった時、大夫黒と呼ばれ、轡越で坂落とした、大変たくましい馬を与えた。侍従の死を悼んで、自分にとつての貴重なもの（馬）を惜しまずに僧に与えたということである。このような義経の侍従に対する行為には、一般の武士にとつて決して望めないような深い感情が入っている。そして、この義経の「情」ある行為に対し、弟の四郎兵衛をはじめとして、これを見る兵者共みな涙をながし、「此君の御ために命をうしなはん事、まったく露塵程も惜しからず」と言つたのである。「主君の為に命を失つた嗣信、侍従の為に財を惜しまない義経」に見られる主従関係の強い情的な結びつきが、こどもも高く評価されているのである。

このように、『平家物語』では、戦の場面で、このような同志的な主従関係に見られる武士の「情」が高く評価されている。では、それと反対の場合ほどのように語られるのだろうか。

平重衡と盛長

次に、生田森の副將軍である平重衡が梶原景季に追われた時の一部を引用する。

究竟の名馬には乗り給へり、もみふせたる馬共おつつくべしとおほえず、ただのびにのびければ、梶原源太景季、鎧ふんばり立ちあがり、もしやと遠矢によっびいて射たりけるに、三位中将馬の三頭を鎧深に射させて、よわるころに、後藤兵衛盛長、我馬召されなんすとや思ひけん、鞭をあげてぞ落ちてゆきける。三位中将これを見て、「いかに盛長、年ごろ日来さはちざらざりしものを。我をすてていづくへゆくぞ」と宣へども、空聞かずして、鎧につけたる赤印かなくなりすて、ただにげにこそにげたりけれ⁽¹¹¹⁾。

重衡は名馬に乗つて、逃げのびていった。しかし、梶原は万が一当たるともかもしれないと思ひ、遠矢を引きしほつて射たところ、重衡の馬の三頭が矢に射られた。この時、後藤兵衛盛長は自分の馬が召されるに違ひないと思つたのか、鞭を振つて逃げて行つた。これを見た重衡は、盛長が「年ごろ日来」の契りを破つて自らを裏切つ

たことを責めたが、盛長は聞こえないふりをしてただ逃げて行ったのである。

ここには、義仲と今井、義経と嗣信の間に見られるような主従の心の固い結びつきがまったく見られない。そして、主人を捨てて「乳母子」である盛長の醜態が描かれている。この場面での盛長の行動は後に、「あなむさんの盛長や。さしも不便にし給ひしに、一所でいかにもならずして、思ひもかけぬ尼公のともしたるにくさよ」(巻第九「重衡生捕」と非難的)とされるのである。

以上述べてきた三組の武士の分析から分かるように、心の固い絆で結ばれている同志的な主従関係もあれば、「情」のない主従関係もある。前引の津田左右吉の言葉が示唆するように、こうした相異なる人間関係の露呈は、武士が実際の戦争場面で特に死に際する時の本心からの選択として描かれているのである。では次に、こうした異なる選択の背後に何が潜んでいるのかを考えたい。

『平家物語』における主従関係への一考察

以上のことから考えると、「主従の固い結びつきがある義仲と今井、義経と嗣信の二組は共に源氏側の武士であり、そうでない場合の重衡と盛長は平氏側の武士である」として示されていることに気が付く。これは、おそらく双方の武士それぞれの異なる生活地盤とライフスタイルに関係があるろう。長い間、都近辺で比較的安逸な貴族生活をしていた一部の平氏側の武士には、そのような固い主従関係を成す外在的な環境が欠けていたのが、一つの理由として挙げられるであろう(二四)。

また、前文でも述べたが、「幼少竹馬の友、一所で死ぬ契」という言葉、「涙を流す、手を取る」という行為に表現された義仲の今井に対する感情、そして自分の為に討死した嗣信に対し、義経の「手を取って涙を流し、尊い僧を呼んで部下の死を弔ってもらって、貴重な馬を僧に与えた」というような嗣信の「情」に応え、彼の名譽(二五)を守るに相応しい行為、一方、部下である今井と嗣信は、究極の形である「死」を以て主人に対する「情」を表している。同志的紐帯さえ感じるこのような固い絆で結ばれた主従関係こそが、『平家物語』の中では高く評価されている。一方、自分の事しか考えていない盛長のような、主人を捨てて振舞は強く批判されたのである。

二二 敵への「情」

『平家物語』の中で、生死を決めざるを得ない闘いの場面で、敵に対する「情」が最も目顕著に示されているのは、巻第九「敦盛最期」に見られる、熊谷直実の敦盛に対する「情」である(二六)。

一の谷の合戦で平家が負け、助け船に乗って逃げようとした時、熊谷直実は大將軍に出会って取り組みたいと思い、馬を進めているところに立派な装束をした人を見つけた。

(前略) 汀にうちあがらんとするところに、おしならべてむすくんでどうどおち、とッておさへて頸をかかんと甲をおしあふのけてみければ、年十六七ばかりなるが薄化粧して、かね黒なり。我子の小次郎がよはひ程にて、容顔まことに美麗なりければ、いづくに刀を立つべしともおほえず。「抑いかなる人にてましまし候ぞ。名のらせ給へ。たすけ参らせん」と申せば、「汝はたそ」と問ひ給ふ(二七)。

組んで落とした敵の頸を取ろうとする時に、若くて自分の子供小次郎ほどの年齢で美麗な容貌であるため、心が打たれた熊谷直実は、どこに刀を当ててよいかも分からず、若武者の命を助けようと言った。戦という討つか討たれるかという非常時に、一の谷で先陣を志して味方と必死に争った熊谷(巻第九「二二之懸」)が我が子を彷彿とさせると言う理由で敵の敦盛に対して繊細な「情」を投げかけたのである。続いて熊谷は、

「あッばれ、大將軍や。此人一人うち奉つたりとも、まくべきいくさに勝つべきやうもなし。又うち奉らずとも、勝つべきいくさにまくる事もよもあらじ(二八)。
小二郎がうす手負うたるをだに、直実は心苦しうこそ思ふに、此殿の父、うたれぬと聞いて、いか計かなげき給はんずらん。あはれたすけ奉らばや」と思ひて、うしろをきつと見ければ、土肥、梶原五十騎ばかりでつづいたり。熊谷涙をおさへて申しけるは、「たすけ参らせんとは存じ候へども、御方の軍兵雲霞

のごとく候。よものがれさせ給はじ。人手にかけ参らせんより、同じく直実が手にかけ参らせて、後の御孝養をこそ仕り候はめ」と申しければ(…中略…)熊谷あまりにいとほしくて、いづくに刀をたつべしともおぼえず、目もくれ心もきえはてて、前後不覚におぼえけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣く／＼頸をぞかいて上げる。「あはれ、弓矢とる身ほど口惜しかりけるものはなし。武芸の家に生まれずは、何とてかかるうき目をばみるべき。なまけなうもうち奉るものかな」とかきくどき、袖をかほにおしあててさめざめとぞ泣きみたる(一九)。

と長々と、自分の心情を述べる。特に「小二郎がうす手負うたるをだに、直実は心苦しくこそ思ふに、此殿の父、討たれぬと聞いて、いか計かなげき給はんずらん。あわれたすけ奉らばや」とする述懐から見れば、敦盛を我が子のように思い、討ちたくないのが彼の主旨である。こうした熊谷の言行からはいわば父性愛のような「情」が読み取れるが、注目すべきなのはこの父性愛が、彼の実の子に向けてのものではなく、敵に対しての「情」としての点である。

後ろに味方の軍勢が迫り、もはや逃げさせられないと気付いた熊谷は、「人手にかけ参らせんより、同じく直実が手にかけ参らせて、後の御孝養をこそ仕り候はめ」と言い、頸を取る決断を下す。しかし、今度は「いづくに刀をたつべしともおぼえず、目もくれ心もきえはてて、前後不覚におぼえけれども」という、より苦しい立場に置かれることとなる。頸を取った後も、「あはれ、弓矢とる身ほど口惜しかりけるものはなし。武芸の家に生まれずは、何とてかかるうき目をばみるべき。なまけなうもうち奉るものかな」と言つて熊谷は泣くのである。この「なまけなうもうち奉るものかな」という言葉に示される、熊谷の自らの行為に対する反省と後悔の心情からは、まさに津田が指摘した、武士を支配する思想の根本である「情」のもう一つの側面を見出すことができるだろう。

また上述の、弓矢を取る、武芸の家で生まれた自分の職分上に対する絶望感からは、平生には見られない彼の激しい心理的葛藤が伺える。しかし、熊谷においては、このような心理的葛藤は常に表面に出て、そして武士という自分の在り方そのものに疑問を持たせているのではない。一の谷では、先陣の功を得るため、同じく源

氏側の武士同士である平山武者所季重らと激しく競争し、決して譲らなかつた(巻第九「一二之懸」)熊谷の必死な様子が描かれている。このような場合は、敵どころか、仲間同士にさえ「情」のない行動をとっている(もちろん、これは先陣を取つて、後の自分の評価及び名誉をあげるのが理由の一つであろう)。それにもかかわらず、ここで見られるように、熊谷は敵である敦盛にかくも暖かい「情」をかけるのである。つまり、ここでは、「親である身で、たまたまこのような我が子のような可愛い敵と出會つて、討ちたくないが討たざるを得ない」という戦の中でも大変厳しい場面に際して、初めて熊谷の真の「情」が流露して、自らの功績よりもそれが重視された、というように描かれている。武士の「情」(ここでは敵への「父性愛」という「情」)は、元来武士の思想の奥底に潜んでいつつも、平生は表面に出でこないが、特別な事情に出會つて初めて自然の情誼として現れ出てくるのである。

二二三 父子関係における「情」

父子関係における「情」について、前引の「小二郎がうす手負うたるをだに、直実は心苦しくこそ思ふに(三〇)」という熊谷の思い、そしてこの強い思いから敵にも「情」をかける彼の言行から、武士の父性愛が描き出されていることが分かる。ここではもう一例、源氏側の武士である梶原父子の例で考えたい。

梶原平三景時の父性愛

一の谷の戦いの中で、河原太郎・二郎兄弟が決死の一番乗りを試みて討たれた。その後、梶原父子について次のように叙述されている。

次男平次景高余りにさきをかけんとすすみければ、父の平三使者をたてて、「後陣の勢のつづかざらんには、さきかけたらん者は、勳賞あるまじき由、大將軍の仰せだぞ」といひければ、平次しばしひかへて、「もののふとりつたへたるあづさ弓ひいては人のかへすものかとは申させ給へ」とて、をめてかく。「平次うたすな、つづげや者ども。景高うたすな、つづげや者ども」とて(…中略…)さつとひいてぞ出でたりける。いかがしたりけん、其なかに景季は見えざ

りけり。「いかに源太は、郎等ども」と問ひければ、「ふかいりしてうたれさせ給ひて候ござんめれ」と申す。梶原平三是を聞き、「世にあらんと思ふも子共がため源太うたせて命いきても何かはせん。かへせや」ととてとてかへす^(三三)。

戦の中で先陣を取ることとは武士の名誉と関わることである。梶原の次男景高も先駆けの功を立てようとして進んだ。しかし、それを見て父の平三は「後陣の勢のつづかざらん、さきかけたらん者は、勳賞あるまじき由」を使者を遣つて知らせた。一番乗りを狙つて討たれた河原兄弟の事は、平三の心を刺激させただろう。ただ一人で敵陣に入るのは極めて危険なことだと平三も知っている。相良亭はその著書「武士道」の中で、「軍艦」が、武士の誉として挙げるものはその筆頭が「一番槍^(三四)」であった(…中略…)。一番槍がなぜ武士の高名の最たるものであるかといえは、それは、もつとも死の危険を犯すからである^(三五)と記述する。ここで相良が対象とした時代とは異なるが、先陣を狙う時の一番槍に秘められた危険は、どの時代でも変わらない。ひたすら猛進する次男景高の安全を心配し、「平次うたすな、つづけや者ども。景高うたすな、つづけや者ども」というように、我が子の景高を失いたくない平三の父性愛が、ここには表現されている。

また、この平三の父性愛が、平次に対してだけではないことが、後に続く文から分かる。激戦の後、一旦敵陣から出た時、「いかに源太は、郎等ども」と源太の姿を見失つて、「ふかいりしてうたれさせ給ひて候ござんめれ」と知らされ、「世にあらんと思ふも子共がため、源太うたせて命いきても何かはせん。かへせや」と言つて再び敵陣に入った平三の様子が描かれている。平三の父性愛は我が子全員に及ぶのである。前述した熊谷の父性愛は我が子だけではなく、さらに我が子のような敵にさえ及んでいる。子の平次と源太にとつて先陣をとつて功を立てるのは、自分の命と父平三の心配よりも大事である。しかしながら、父平三及び熊谷にとつては、名も大事だが、それより子への「情」の前には二の次なのである。このように、「平家物語」は時として、「名誉より、子の方が親である武士にとつてより重要である」という武士の一面をも描いている。

三 「情」とは何か

ここまで具体的場面をもとに考察してきたことを踏まえて、そもそも日本人にとつて、そして初期武士にとつて「情」とは一体何なのかについて考えてみたい。まずは「情」の辞書的定義を引用しよう。

『日本国語大辞典』では、「情(なさけ)」^(三六)について、「①人間としての感情。人間みのある温かい心。人情。情愛。②他にはたらきかける感情、あわれみ、思いやりなど。好意。親切。」^(三七)と、「情(じょう)」について、「①物事に感じて起こる心のはたらき。感情。さもち。②他人を思いやる心。なさけや、まごころ。情愛。」^(三八)と解釈している。これらは、共に「感情」と「思いやり」の意味を持っている。また、「情」と言えば、特に「心情」と「人情」のような熟語が日本文化の特徴としてよく議論される。源了圓は著書『義理と人情』の中で、「日本社会における人間関係とそれを支えた日本人の心情を―しかもそれはとくに傑出した人びとのそれではなく、名もなき民の心情を、『義理と人情』というテーマで描いてみたい」^(三九)と述べている。しかし、源了圓自身も述べるように、「義理と人情」が特に問題となつたのは近世封建社会においてであった。他方、源了圓は「情は『まごころ』とも読み、日本では古くから心の中心的役割を演ずるもの、とみなされてきた。この情の他者に向かつて発動したすがたが情けであり、共感である」^(四〇)とも述べている。すなわち、「情」は、「まごころ」や「なさけ」という、古来からの日本の心情を分析する際にも用いられるのである。源了圓が日本文化の性格を「情と共感」という側面から捉えているように、多義的で、かつ歴史的に意味が変遷してきた「情」は、日本文化を考える上で大変重要なキーワードであると言えるだろう。ここでは、『平家物語』における「武士の情」について、その一端についてのみ、具体的場面から考えてみた。主従関係について言えば、特に大将と乳母子の間に情誼的結合としての「情」がある。これは源氏側の武士の主従関係に著しく表され、しかもそれは同志的紐帯があったように思われる。一方、平氏側の武士にはあまりこのような固い絆で結ばれている主従関係が見えない。しかし、この二つは共に生死を決める際の武士の本当の「情」の表れとして描かれている。熊谷の「敵」敦盛への「情」は、元来武士の

思想の奥底に潜んでいる「なさけ、慈悲」であり、そして特別な事情に会って初めて自然の情誼として現れてくるのである。また、親である武士の、このような「情」は、武士の職分上の義務との矛盾も露呈させる。父子関係に描かれた父の子への愛は、親である武士にとって生きる根拠としての「情」である。しかし、父性愛に見られるこの「情」は、時に名譽と矛盾する。先陣を取って名譽を手に入れるのは、子にとって何よりも重要視されている。しかし、身の親である武士にとって名譽は二の次とされたのである。こうした「情」の多面的性格については、またあらためて考えることとしたい。

注

- (一) この点については、菅野覚明『武士道の逆襲』講談社現代新書、二〇〇四年、の中に詳しく論じられている。
- (二) 前掲『武士道の逆襲』において、菅野は「本来の武士道」を、近世武士道（業隠）的武士道と、士道（儒教的士道）が共に目ざそうとした理想の当体を指すとし、この二者を根本的に一つの「武士道」として取り扱っている。そして、明治武士道を、それらとは全く別物であるとする。
- (三) 津田左右吉「文学に現はれたる我が国民思想の研究」(三) 岩波文庫、一九七七年、一一三—一四四頁。
- (四) 前掲「文学に現はれたる我が国民思想の研究」、二四—二五頁。
- (五) 前掲「文学に現はれたる我が国民思想の研究」、二七頁。
- (六) おそらく時代によってかなり違ってくるであろう。
- (七) 『平家物語』は読み本・語り本に分かれて複数の異本がある。ここでは、それらの異本の異同の問題には立ち入らない。本稿では、「東京大学国語研究所蔵の『平家物語』(旧高野辰之氏所蔵。通称、高野本、覚一別本)を用い、覚一系の諸本および元和七年(一六二二)板本(元和版)屋代本、真字熟田本、正節本などを参照」した、新編日本古典文学全集『平家物語』(小学館、一九九四年)を使用する。
- (八) 市古貞次校注・訳『平家物語②』小学館、一九九四年、一七四頁。
- (九) 厳密に言えば、今井兼平は木曾義仲の「乳母子」である。「奉公」を中心に成り立った戦国時代の主従関係は、必ずしもこの幼馴染のようなものではないので、多少違いがある。ただ、この二人の間では、義仲は主、今井は従であることは疑えない事実である。本稿は、後述する平重衡と嗣信の関係もこのように主従関係に限って考察する立場である。
- (一〇) 前掲『平家物語②』、一七六頁。
- (一一) 義仲は今井に「弓矢とりは年来日まいかなる高名候へども、最後の時不覚しければ、ながき疵にて候なり。御身はつかれさせ給ひて候。つづく勢は候はず。敵におしへだてられ、いふかひなき人の郎等にくみおとされさせ給ひて、うたれさせ給ひなば、「さばかり日本国にきこえさせ給ひつる木曾殿をば、それがしが郎等のうち奉ったる」など申さん事こそ口惜しう候へ」(巻第九「木曾最期」というように自害を勧められた。ここからは、今井にとって、自害は単なる

死ぬための方法ではなく、敵に打たれる恥から逃れ、今までの自分の高名を保つ唯一の方法だというように読み取れる。固い主従関係に結ばれているからこそ主人の事をこのように考え、そして自害を勧めたのである。また、その自害のやり方は残酷であるほどに、自分の名をいっそう揚げられるとして描かれているようである。

- (一二) 前掲『平家物語②』、三五四—三五五頁。
- (一三) 前掲『平家物語②』、一三〇—一三二頁。
- (一四) 武士の主従関係は単純に男と男の関係を目指す。モリス・バンゲが「多くの場合開いたのなかで鍛えられたゆえに、結婚の絆よりも緊密なものであった」(引用はモリス・バンゲ著 竹内信夫訳「自死の日本史」講談社学術文庫版、二〇一一年、一六七頁)と述べるように、厳しい環境は武士の主従の絆を強くし、快適な生活は同じく主従関係を希薄なものにする。繁栄の絶頂に立った平氏側の武士には、精神面を向上させる外的な要素を欠いたまま、いきなり合戦に直面したため、平氏側の武士は主人の命よりも自分の身の上の安全を考えたのも道理であろう。それに反し、源氏側の武士は主従一体となって辺鄙な地方の厳しい環境の中で日々を送ってきた。主従同心で苦楽を共にし、気性・生活などあらゆる面で心身ともに鍛えられてきたため、戦という生死を決める際に主人が侍従を思い、侍従が主人を思う気持ちがある情誼として現れてきたと見ることが出来るだろう。
- (一五) 嗣信自身の言葉「……源平の御合戦に、佐藤三郎兵衛嗣信といひける者、讃岐国八島のいそにて、主の御命にかはり奉つてうたれにけり」と、未代の物語に申されむ事こそ、弓矢とる身には今生の面目、冥途の思出にて候へ」(巻第十一「嗣信最期」)から、主人の身代りとなって死ぬのは名譽であることが分かる。
- (一六) 敵への「情」について、生死を決める戦闘以外の場面で、源義仲の瀬尾太郎兼康に対する情(巻第八「瀬尾最期」)源頼朝の平重衡への情(巻第十一「千手前」)源義経の平宗盛に対する情(巻第十一「腰越」)などはそれである。
- (一七) 前掲『平家物語②』、一三三頁。
- (一八) 「此人一人うち……勝つべきいくさにまくる事もよもあらじ」までの熊谷の言葉から、仏教の無常観が混じっているとうかがえる。
- (一九) 前掲『平家物語②』、一三三—一三四頁。
- (二〇) これは巻第九「一二之懸」の章段に詳しく描かれている。父子とも先陣を目指して奮戦する中、熊谷は「いかに、小二郎、手負うたか」と聞いた。怪我をしたと知らされた後、また「常に鎧つきせよ、うかかすな。鎧をかたぶけよ、内甲射さすな」と射られないように丁寧に教えた。ここからは熊谷の父性愛がうかがえる。
- (二一) 前掲『平家物語②』、一一五—一二六頁。
- (二二) 相良亨は「武士道」(講談社学術文庫版、二〇一〇年)の中で、「一番槍とは一番に敵陣に矢を入れた者、突入した者である」と説明している。
- (二三) 前掲『武士道』、一六頁。
- (二四) 「情」について、ほかにもたくさん意味があるが、津田が言った「情」に最も近い意味の「情」の解説を抽出した。
- (二五) 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典(第二版) 十巻』小学館、一九七二年、一四八頁。
- (二六) 前掲『日本国語大辞典』(第七巻)、二九頁。
- (二七) 源了圓「義理と人情」中公新書、一九六九年、二頁。
- (二八) 前掲「義理と人情」、二頁。